

「抗菌薬の適性使用について」

抗菌薬適性使用支援チーム（AST）薬剤師

高橋慎太郎

感染症の原因には「細菌（肺炎球菌や大腸菌など）」「ウイルス（インフルエンザや新型コロナなど）」「真菌（カンジダなど）」「寄生虫（マラリアなど）」といったものがあります。抗菌薬（抗生物質）とは、感染症の中でも「細菌」による感染症の治療に用いられる大切な薬です。

現在、世界中で「薬剤耐性菌」という、抗菌薬が効かない細菌が増え続け、大きな問題になっています。このままでは将来、治療できたはずの一般的な感染症でさえ治療困難となり、命を落としてしまう未来がきてしまうかもしれません。

この耐性菌が生まれる主な原因の一つが、「抗菌薬の不適切な使用」です。私たち一人ひとりが以下の2つのポイントを理解し、行動することが大切です。



①ウイルス感染に抗菌薬は効きません



細菌もウイルスも感染症の原因となるという点では同じですが、根本的に構造が異なります。細菌感染の治療には「抗菌薬」を、ウイルス感染には必要に応じて「抗ウイルス薬（インフルエンザの場合はオセルタミビル：タミフル®など）」を使用します。

風邪の原因となる微生物には様々なものがありますが、ほとんどの場合ウイルス（ライノウイルスなど）が原因であるとされています。風邪をひいた時に抗菌薬を服用すれば治ると思われるかもしれませんが、ウイルス感染の場合は、効果がないばかりか、腸内にある良い細菌まで殺してしまい、結果として薬剤耐性菌を発生させるリスクを高めてしまいます。風邪の特効薬は、休養と栄養、そして水分補給です。

②処方された抗菌薬は、必ず最後まで飲み切ってください



医師が抗菌薬を必要と判断し処方した場合、症状が良くなったからといって自己判断で飲むのをやめないでください。（ウイルス感染であるインフルエンザ治療薬も同様）

抗菌薬を中途半端に中断すると、死滅しきれなかった細菌が薬への抵抗力を持ち、強力な耐性菌として生き残ってしまいます。「飲み忘れた分をあとで飲む」「家族にあげる」などは厳禁です。